

聖書：使徒 2：37～47

説教題：聖霊による教会の祝福

日時：2013年6月9日

今回はペンテコステの日のペテロの説教を見ました。少し前まではおっちょこちょいの代名詞のようだった彼が、生まれ変わった人のように大胆に説教をしました。ペテロはこの聖霊の注ぎは、旧約聖書の預言の成就であることをヨエル書を引用して語りました。またこれは十字架にかかって復活したイエスが、天に昇って行なわれたみわざであると語りました。神はここに明確なメッセージを語っておられる。それはあのイエスは、神がキリストまた主として立てたお方である。そのお方をあなたがたは十字架につけたのです！とペテロは述べました。

まず今日の箇所を示されていることは、人々の反応です。37 節：「人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、『兄弟たち。私たちはどうしたらよいのでしょうか』と言った。」 彼らは自分たちが大変なことをしてしまったことに、今更ながらに気付きました。神がキリストまた主として立てておられるお方を受け入れなかったばかりか、退け、殺すといふとんでもない反逆の罪を犯してしまった。このままで赦されるはずはない。そこで彼らは「私たちはどうしたらよいのでしょうか。」と尋ねたのです。そんな彼らにペテロは二つのことを命じました。一つは「悔い改めなさい」ということです。これは考え方を転換することです。自分の今までの生き方、考え方が誤っていたことを悟り、悲しみ、神が示している道に沿って新しく生き始めることです。もう一つは洗礼を受けることです。「イエス・キリストの名によるバプテスマ」とあるように、イエス・キリストに信頼し、この方と結ばれるところにある新しい生を願うことです。その時にどんな祝福が与えられるかについて、ペテロは二つのことを約束します。一つは「罪の赦し」、もう一つは「聖霊を受けること」です。もちろん洗礼の儀式そのものが魔術的にこれらの祝福をもたらすわけではありません。洗礼を受ける人は、悔い改め、キリストに信頼する者として、それを受けます。そうしてキリストにつながる時、その人の罪はどんなに大きな罪でも赦して頂ける。この時のユダヤ人のようにキリストに逆らい、キリストを殺した罪でさえ赦される。決して取り消すことはできないと思われるような大きな罪でも、キリストの無限の価値を持つ身代わりの死によって全くきよめていただける。そして目の前の弟子たちと同じように、聖霊を豊かに自分の内に宿す祝福の生活が始まるのです。もちろん厳密に言えば、すでに聖霊は聴衆の間に働いています。彼らが説教を聞いて心を刺されたこと自体、聖霊の働きです。またキリストへの信仰を告白して洗礼を受けるとしたら、それも聖霊の働きです。しかしそうしてキリストに結び付くことを通して、旧約時代から約束され、神の民があこがれ待ち望んで来た聖霊の祝福に誰でもあずかることができるのです。

このペテロの勧めを受けて、何と 3000 人がこの日にバプテスマを受けました。イエス様が公生涯の間、伝道活動をして救いに導いた人の数をはるかに上回る数です。こ

れは聖霊が共にいて導いてくださるなら、こういう結果が生じるということを、この聖霊の時代の最初にはっきり示すためのものだったでしょう。1章8節で「聖霊が臨む時、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」と言われていましたが、聖霊が共にいてくださるなら、このようなことは可能となる。私たちもこの聖霊により頼んで、イエス様に命じられた務めに励みたいと思います。このペンテコステの日の出来事は、イエス様の命令に従ういつの時代の教会にとってもチャレンジであり、大きな励ましなのです。

さて聖霊を注がれ、新しい時代を迎えた教会はどのような姿を示していたか、が42節以降に記されています。ここに示されているのはモデル教会です。もちろん完全な教会であったわけではありません。後に見るように、この教会にも偽善者は含まれていました。偽りの教えも混入しました。様々な問題も生じました。しかし聖霊の注ぎを受けて、聖霊に満たされた教会はどのようであったのか、42節を中心として、4つの特徴を見ることができます。

まず一つ目は「使徒たちの教えを堅く守り」。新しい時代の教会の姿として、他のことを先に書くこともできたでしょう。元気な教会、喜びに満ちた教会、交わりが盛んな教会、人々がどんどん増えている教会、……。しかしそのことが最初には来ていません。あるいは彼らはペンテコステの日に不思議な体験をしましたから、似たような聖霊体験を日々求めていたとしてもおかしくありません。ところが当時の教会の第一の特徴としてルカが記していることは、「使徒たちの教えを堅く守り」ということだったのです。すなわち教会は何よりも使徒的であるということです。これは今日に当てはめれば、使徒たちが書き記した新約聖書に忠実であるということです。聖霊に満たされている教会が示す第一のしるしは、聖書をよく学び、聖書に従う教会ということです。これは個人にも言えること同じでしょう。聖霊に満たされる人になりたいと思うなら、その人がまず向かうべきは特殊な体験をすることより、聖書に学ぶこと、聖書に聞くことなのです。

二つ目の特徴は「交わりをし」。交わりの基本は、まず神との交わりです。Iヨハネ1章3節に「私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。」とあります。また1コリント13章13節に「聖霊の交わり」という言葉もあります。交わりとは父、子、聖霊の三位一体の神の交わりの中に私たちも加えられることです。私たちはその輪の中にただ恵みによって加えられました。そしてキリストにあって救われた者たちはみな、この交わりに加えられています。この交わりを認め、感謝し、これを保ち、深めることです。ですからもし私たちが「交わり」と称してある閉鎖的なグループで楽しい時間を過ごし、そこに他のクリスチャンが入って来ることを好ましくないと思うなら、それは正しい交わりとは言えません。

この新しい時代の教会は、この交わりにおいていくつかの特徴を示しました。その一つは、「いっさいのものを共有にし、資産や持ち物を売っては、それぞれの必要に応じて、みなに分配していた」ことです。霊的に主において一つであるだけでなく、持

ち物においても共有し、分かち合っていた。これは共産主義や社会主義を聖書は勧めているということではありません。人々が私有財産を持つ権利はもちろん認められていました（5章4節を参照）。ただこの時の教会の素晴らしい点は、みながこれを自発的に行なっていたことです。強制されてではなく、自ら進んでこのように行なっていた。聖書が示しているのは、外的な力でみなが同じレベルの生活をするようになることではありません。神は私たち一人一人を顔かたちが違うように造っているのと同様、それぞれの持ち物や財産にも違いがあるように造っておられます。その違いを否定して、画一的なものにすることが神の御心ではなく、その違いを持って互いに交流し合うように、自発的に支え合うように、愛の交わりをするように、というのが聖書が示す御心です。

また彼らは「喜びと真心をもって食事をともにし」とあります。食事のテーブルを囲んでの交わりは、旧約時代から有意義なものとして聖書が勧めています。これはお互いの関係を築き、一つ家族であることを体験するための貴重な機会です。私たちの教会のランチクラブと同様、多くの教会で礼拝後に食事の交わりがあるのも、この伝統に沿ったものでしょう。

三つ目の特徴は「パンを裂き」。これは聖餐式を指す言葉です。彼らはキリストが制定されたこの恵みの手段を大切にし、いつも新しく恵みを受け取りながら、礼拝をささげる生活をしていました。46節に「そして毎日、心を一つにして宮に集まり、家でパンを裂き」と書いてあるのを見ると、彼らは宮での礼拝と共に、家々に別れての礼拝も行なっていたようです。そしてそこでパン裂きを行なっていたようです。おそらくエルサレムの宮では一同に会してよりフォーマルな礼拝を、そしてそれぞれの家でパンを裂き、その後、食事会も行なうというよりインフォーマルな礼拝をしていた。また彼らの礼拝生活には43節にあるように「恐れが生じ」という面が見られた一方、46節にあるように「喜び」も満ちていた。こういったバランスも特筆すべきことと思います。

そして4つめは「祈り」をしていた。聖霊を待ち望む間も、弟子たちは集まって祈りに専念していましたが、聖霊を受けた後にも祈る生活を続けていました。これは一人一人が個人で祈っていたと言うより、共に集まって祈っていたことを示すものでしょう。

さて、これまで聖霊に導かれた新しい時代の教会の姿を見て来ましたが、最後にこれとの関係で今日の箇所最後に言われていることに心に留めたいと思います。47節の「主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。」ペンテコステの日に3000人が教会に加えられましたが、その教会はすべての民に好意を持たれ、さらに救われる人が仲間に加えられ続けたのです。しかも毎日です！そのように導いてくださったのは「主」だと言われています。人を救いに導く主権は主にあります。42節から信者たちの姿がずっと記されている中で、ルカはそのまま彼らの活動としてではなく、主のわざとしてこのことを書いています。改めてこれは主の主権に属する主のみわざであることを私たちは心に留めたいと思います。

と同時に、この主のみわざは、その前に記された教会の姿と無関係ではないことも心に留めたいと思います。聖霊が注がれて新しい時代を迎えた教会は、色々素晴らしい特徴を示しました。それらの聖霊に導かれた教会の姿とセットで、47節最後の主のみわざもあるということでしょう。ですから主のみわざを祈り求める私たちは、その前に記された聖霊に満たされた教会の姿に少しでも近づくことを求めて行かなければなりません。

私たちは自らを振り返ってどうでしょうか。最初に述べましたように、今日の箇所
の教会の姿は、私たちにとってモデルとなるものです。私たちにこれらの教会に見られた特徴は見られるでしょうか。聖書の御言葉を良く学び、これを守っているでしょうか。神が導き入れてくださった交わりを尊び、自分の持ち物さえも必要に応じて進んで分かち合う交わりに生きているでしょうか。礼典を大事に守り、公の礼拝と共に、それぞれの家でも礼拝する者でしょうか。また共に集まって祈る祈りを大切にしているでしょうか。比較すると色々足りないところが見えて来るかもしれません。しかしこのモデルは私たちを落胆させるためのものではありません。これは聖霊によって導かれた教会の姿です。ですから私たちも聖霊によって、このような姿を示すことができる。いやそういう目で見ると、私たちの教会にも聖霊が働いてくださっているがゆえのこれらの特徴を確かに見出すことができるでしょう。私たちはそれらは聖霊が導いてくださったものとして今朝改めて感謝したいと思います。しかしまだまだ祈り求めるべきところがあることも事実でしょう。なお悔い改めるべきことがあることも事実でしょう。私たちは自らを振り返り、改めて聖霊に祈りたい。私たちの教会にも、益々これらの特徴が豊かに現れ出るように。聖書の学びに、交わりに、礼拝に、祈りに、聖霊に導かれている者たちであることが益々現れ出るように。そのような歩みとセットで、主も毎日、救われる人々を仲間に加えてくださるように。このことを祈り求めて、聖霊の祝福を豊かに受け、主に与えられた宣教の使命を全うして行く教会の光栄と幸いに歩んで行きたいと思ひます。